

平成21年度第3回鳥取市政懇話会「広域交流観光」部会議事概要

日 時：平成22年1月20日（水）15：00～16：00

場 所：鳥取市役所本庁舎6階全員協議会室

出席者

【委員】6名

【鳥取市】林副市長、観光コンベンション推進課 漆原課長補佐
鳥取・因幡の祭典推進局 森山企画員

【事務局】田中

開 会

部会長あいさつ

- ・前回の部会でテーマを設定した「因幡の祭典を含んだ滞在型観光都市」について、調べたことや思い等、一人ずつご意見をいただきながら進めたい。最後に皆さんの意見をもち寄って話をし、鳥取市からも意見をいただきたい。

意見交換

委員

- ・滞在型観光というと、ひとえに交通の便に尽きるのではないか。飛行機は便数が少ないし、広島、大阪便もなくなってしまった。JRはスーパーはくとうがあり、便利かもしれないが・・・
- ・資料（観光白書たき台）に「情報通信技術の発達により、個人で簡単に旅行行程が組み立て可能」とあるが、高速道路が開通しつつある中、鳥取自動車道はJH（現NEXCO）の管轄に入っていない。これでは渋滞情報も出てこないし、経路検索もできない。開通しても、あるということすら認知されない。鳥取市として、JHの高速道路網に入れてもらうよう働きかけが必要ではないか。

委員

- ・昨年最後の部会はジオパークを中心にした意見交換だった。今回、事前に送付された観光白書等を見て、ジオパークの懸案事項はどうするのかという思いがあった一方で、ジオパークについては目から飛び込んできたものの感想しか持ち合わせていないという立場から考えると、本来の広域交流観光部会としての在り方、テーマの求め方に近づくことではないかと歓迎している。
- ・昨年は、鳥取の観光といえは具体的には砂像、因幡の祭典、締めくくりにジオパーク登場だと思う。常に考えなくてはならない問題は、どこまで地元の人が認知し、歓迎し、参加しようとしているのか、はたまた参加しているのかということ。
- ・砂というテーマひとつとらえても、鳥取砂丘という大黒柱がある。素朴な地形という中で、例えば浜村海岸で行われている京都造形大学の砂像作りは10年間続いている。

廃れきった浜村温泉のイメージからは、非常に新しい斬新な地域おこしにつながるのかと思っていたら、砂の美術館につながっていった。

- ・鳥取市の成り立ちを考えたときに、地域にどう密着してきたのか、素朴な自然の在り方というものを評価してもよいのではないか。ジオパークという非常に高度な地質公園の掘り起こし、組み立てもさることながら、地域住民がどう参加してきたのか、どうしたら参加してもらえるのかをとらえる観光の在り方が、長い目で見たら結果的に生き残れるひとつのテーマではないだろうか。

委員

- ・本日配布された冊子（因幡周遊ルート徹底ガイド：祭典推進局資料）を見て、自分が思っていたものが出来上がっていると感じた。どこに、何部くらい配布したのか知りたい。
- ・旅行会社に、鳥取に観光客を誘致するためにどのようにしているか尋ねてみた。鳥取には地図がない。ぱっと見て分かりやすく、持ち運べるものが必要。
- ・趣味の会、会議等があればそれを観光に結びつけるという方法をとっているとのこと。趣味の会といえば主婦の方々、特に、旅行が好きな年配の方々等、様々な分野に広がっていく。
- ・鳥取駅周辺について観光客からのお尋ねが多いが、適切な資料がないとのこと。作成してほしい。
- ・県外の旅行会社にも冊子を置かせてもらうなど、アクションを起こさなければ人は日帰りで帰ってしまう。
- ・砂像フェスティバルには感激した。これからもぜひお願いしたい。

委員

- ・商品となりうるものはたくさんある。それをネットワークの中でどうやって結んで、うまくソフトを作って、どうやってたくさん来てもらうかということ。
- ・鳥取市内にもたくさん材料があるが、活かすことができていない。極端なことを言えば、一生懸命に中心市街地活性化に取り組んでいるが、やっていくエネルギーが出てこない。例えば、鳥取に末広、永楽という温泉があるが、城崎のように温泉をまわるようなことができるのか。完全に商品にして、ネットワークにのせなければならない。
- ・今、旅館は泊まりよりも日帰りのほうが多い。鳥取のネットワークを考えた時、ソフトを一生懸命しているのは鹿野。地域の人に参加して、様々な仕掛けを作っている。補助金等もうまく使いながらやっているのが鹿野。鹿野のコースは三朝とセットになっている。
- ・鳥取の砂丘がなぜできたのか、そのこと自体が大きな遺産。科学、文化、生活等人間のあらゆる要素が含まれている。どうやって掘り起こし、ソフトにし、どう世界に伝えるか。そうしなければ、ジオパークは本当の意味での審査に通らない。

委員

- ・鹿野は食文化、娯楽等、独特な活動を行っている。しかし、他地域とつなぐことができていない。鳥取は発信するのが苦手だという話が出てくる中で、ここ数年非常にその

ようなこともできるようになったと喜んでいる。

- ・松江はお城等様々な観光資源に恵まれている。鳥取は何かと考えると、温泉やカニは他の地域にもあるので、やはり砂丘だと思う。
- ・近年、砂像が全国的に有名になってきた。今は一定の時期にしか見るができないので、鳥取に行けば砂像が見られると全国にアピールするのであれば、年間通して実施してほしい。
- ・砂丘を含め、自然的に恵まれたところをこれからどういう形で観光につないで活かしていくか、県も市も一緒になって考えている。自分達に何ができるか探し、協力したい。それがPRする大きな目玉になればと考えている。

部会長

- ・先程松江の話が出たが、鳥取は中国5県の中で、国際観光都市ではないという思いがある。
- ・松江の観光協会のホームページを見ると、バナーは17社ありほとんど地元業者。鳥取は5つで全て県外である。なぜ地元ではないのか。地元への投げかけ、皆でやろうという気持ちが薄れてきていると感じる。
- ・因幡一円、足を運んでいただける仕組みづくりについて、皆さんのお知恵をお借りできればと思う。
- ・砂像を見てから皆生に泊まるというのが一般的な流れだという話を聞くと、残念だと感じる。因幡にお金が落ちる仕組みができればと思う。

委員

- ・鳥取で、温泉という商品を起点にして膨らませる。ジオパークに絡んで必要なものは温泉、砂丘だと思う。
- ・鳥取市は吉岡温泉の泉源を整備した。吉岡温泉のお風呂は素晴らしいが、温泉の使い方が、商品として入るのではなく、仲間内で楽しむという感じである。相対的に温泉が無駄遣いされている。
- ・ホテルニューオータニは吉岡温泉に泉源を持っているのに、どうして持ってきて使わないのか。現に三朝温泉は鳥取にお湯を配達している。
- ・鳥取に来た観光客が、温泉に自由に入れる仕組みを作るべき。議員にもリーダーシップをとってもらいたい。

部会長

- ・ここで、鳥取市から説明等していただきたい。

鳥取・因幡の祭典推進局 森山企画員

- ・冊子についてのお尋ねがあったので、説明したい。裏に記載のあるとおり、実行委員会が作成したもの。実行委員会は行政だけでなく、各種民間団体も入っている。
- ・実行委員会は4年前からやっており、平成21年4月からは自動車道開通に合わせて様々なものを仕掛けてきた。これはその中のひとつで、それぞれの魅力をつなげて作ったもの。各分野に分かれ、主に宣伝・広報活動を行ってきた。当初5万部作成し、

その後数万部単位で増刷している。

- ・因幡地域は広報活動、情報発信が下手だとかねてから言われていることを受け、数多くのイベントにイナバズを出し、新聞社、マスコミ、旅行会社等くまなくまわり、東海地方から九州まで営業活動を行った。その際に冊子も持って行った。情報発信としては、打てる手は打ったという状況。しかしそれだけでは不十分、単年だけではだめなので、鳥取の認知度が高まるよう活動を継続していく必要があると考えている。祭典は3月で終わりだが、後継の団体も作りながらさらに広報活動を継続してやっぺいこうと考えている。
- ・実行委員会で試算したところ砂像フェスティバルの経済効果は100億円を超える。多くの部分はお土産販売だが、広報部分も重要。関西のキー局に出演して情報発信したところ、それを皮切りに取材陣が多く来た。今までの展開とは少し違う動きが出つつある。
- ・行政の職員が動けば成功する、盛り上がるというものでは決してない。地域の方々がいかに動いていくか、その素地を作ることが大切。先程後継団体という話をしたが、観光協会等を通じて、継続していこうという声が民間団体からあがってきている。そのような意識が、個々の自治体の範囲ではなくスクラムを組んで地域を売り出していこうという動きにつながりつつある。
- ・加えて、地域の方々にいかにもてなしや知識をしっかりと身に付け、伝えていこうという意識をもっていただくか、そのための施策を展開するのが観光サイドのキーだと実感している。
- ・浜村海岸での砂像作りに昨年参加し、教授とも話をした。これが今の砂像に変わったのではなく、福部村時代に、砂丘を持っている地域として何ができるか、ということからはじまったのが砂像である。それを継承しながら砂の美術館、砂像フェスティバルを行っている。浜村の動きは、大変高い評価を大学側でもされているようなので、おそらく来年以降も続けられるのではないかと。地域とのつながりも強いようである。

観光コンベンション推進課 漆原課長補佐

- ・事前に送付している観光白書のたたき台が、鳥取市の課題の抜き書きである。まさに委員の皆さんの意見は的を射ている。
- ・特に、松江の年間観光入込客が800万人という中、鳥取砂丘が200万人程度。これだけの差がつく理由をしっかりと分析する必要がある。
- ・様々な要因が絡んでいるが、特に、三朝、皆生温泉については、決して立地は良くない。吉岡温泉のほうが市内から時間もかからない状況。そこに至るまでは二次交通の問題、全体の宿泊施設の許容量の問題、魅力ある観光素材をこれまでネットワーク化していなかったという問題もある。
- ・県全体の外国人観光客も、全国の約0.4パーセントしかない。
- ・市として今後考えていかななくてはならないのは、祭典で得た人的ネットワーク、魅力ある観光素材をどのように磨き上げていくか、魅力的イベントをどう展開するか、さらにはおもてなしの向上という部分にしっかりと取り組むということ。
- ・これまでしっかりした行政の支援がなされていなかった温泉施設等もあるので、テコ入れしていきたい。

鳥取・因幡の祭典推進局 森山企画員

- ・ご意見にあるように、鹿野は魅力あるまちづくりを行っている。住民の方々が自ら行動を起こし、行政が支援するという構図がある。自分たちで引っ張っていこう、こういうことがしたい、という動きが大切。

委員

- ・確かに鹿野は以前よりとても綺麗になった。一軒一軒かざぐるまが置いてあったり、そば道場があったり、魅力がある。

林副市長

- ・ここまでくるのに10年くらいかかっている。当初は批判もあったが、民間中心に行い、行政も支援しながら、こういうまちを作っていこうという協定を結んで、昔のまち並みを再現するような形になっている。人がたくさん来るようになり、住民が誇りに思い、来られる方に説明されるという良い状態。全国からも注目され、住民と行政がうまく一緒になってやっている例。
- ・まち並み、食べ物、歴史、文化等の身近にあるもの、自分のまちを見直し、魅力を発見して磨き上げる作業は当然必要。行政もそれをつなげる、環境を整える等していかなくてはならない。

委員

- ・あるさびれたまちが、昭和の時代のまちおこしをして活性化し、全国的にも注目を集め、成功している。
- ・一年に一回、研修旅行で古いまち並みを見て勉強して帰っている。新しいまちばかりにはもう飽きている。ふるさとを思い起こしたいという心が誰にでもある。それがまちおこしではないかと思っている。

委員

- ・長期的展望を持って、吉岡温泉、永楽、末広の温泉整備のプランニングをしてほしい。温泉を流しているのなら、お金にして売るとか。
- ・せっかく三朝と鹿野が一緒になっているのだから、それを鳥取につなげてほしい。ひとつのネットワークの起点となるのが温泉ではないか。

林副市長

- ・鹿野と吉岡は今つながっている。鳥の劇場に来られた方々が、吉岡に宿泊したりしている。

委員

- ・もっと行政が手を入れてやらないといけない。吉岡を一つにさせないと。

委員

- ・ひとつ提案をしたい。冊子の5ページに、「水のある風景」がある。これは現地でとらえた時、あるいは都会で生活する人達にとって、何ともいえない魅力の材料である。温泉も大切。水をテーマにした取り組みにこだわるのは、まちなかにはないから。精神的にさびれている中、周辺に広がる水資源、水を追求していく、水を大事にした施策も必要ではないか。
- ・もう一点だけ、資料から海外顧客志向が読み取れるが、それが観光の目玉となるという錯覚に陥るのがこわい。様々な民族意識があり、日常生活においても日本の規格にあてはめられない部分が多々ある。迎えるのであれば、民族感情も含めて、勉強が必要である。

部会長

- ・様々な意見をありがとうございました。今回意見が出そろわなかったため、次回も引き続き同じテーマで進めたい。先程のおもてなしの話は、人材育成問題になるうかと考えている。また提案をしたい。
- ・林副市長に最後に一言いただき、会を終了する。

林副市長

- ・短い時間の中、貴重なご意見をいただいた。
- ・祭典を今後引き継ぎ、さらに発展させるため、広域観光ネットワーク協議会の設立の準備をしている。さらに鳥取県の因幡として売り出していく段取りもしたい。
- ・これからも、おもてなし等様々な論点をいただき、鳥取市としても観光に力をいれていきたい。本日はありがとうございました。

部会長

- ・以上で閉会する。ありがとうございました。

閉会